

# 日本聖公会 管区事務所だより

日本聖公会管区事務所  
162-0805 東京都新宿区矢来町 65  
電話 03 (5228) 3171 FAX 03 (5228) 3175  
発行者 総主事 司祭 矢萩 新一

## 和解のつとめ

管区事務所総主事 司祭 エッセイ 矢萩新一

先週、日韓のNCC(キリスト教協議会)共同会議が、11年ぶりに開催され、出席してきました。韓半島の平和統一の課題や日韓両国の右傾化のことが分かち合われ、青年や女性や様々な委員会の交流が継続されてきたことへの評価や、今後の更なる宣教協力について話し合われました。

会議に先立ち、ソウルの日本大使館前で行なわれている水曜定例集会(元・日本軍「従軍慰安婦」の方々への謝罪を求め抗議する集会)が1,200回を迎えるということで、日本キリスト教協議会の議長が集会の中で、謝罪と連帯のアピールをされました。今まで、日本人キリスト者、ことに男性がこの集会で発言する機会があまりなく、大変意義のある発言だったと評価されました。韓国もベトナム戦争の際に同じような過ちを犯していることを告白しながら、戦争がもたらす、特に女性と子どもたちへの暴力について否を唱える集会で、多くの中高校生や青年たちも参加していました。

また、先月末に広島で行なわれた人権セミナーでは、広島の被爆者の証言を聞き、あらゆる核被害者を世界からなくそうと活動されている方のお話をうかがい、広島平和記念資料館で在日韓国人の方の証言をお聞きました。差別され続けてきた被爆者の中でも更にひどい仕打ちを強いられてきた方のお話を聞きし、戦争のもたらす圧倒的な暴力と人権侵害、核と人類は共存できないという認識を新たにしました。

「日本では、戦後生まれの世代が、今や、人口の八割を超えています。あの戦争には何ら関わりのない、私たちの子や孫、そしてその先の世代の子どもたちに、謝罪を続ける宿命を背負わせてはなりません。」と戦後レジウムからの脱却を強調し、沖縄に基地の負担を押しつけ、戦争のできる法律を強行採決し、福島事故が無かったように原発の再稼働をしようとする日本政府の方向性は、やはりどこかおかしい、過去の過ちを認めて心から謝罪し、その責任を負っているようには思えないと感じます。現代の教育制度の中では、近代史は相当駆け足でしか教えられていません。しかも、負の歴史の記述がどんどん無くさ

## □会議・プログラム等予定

(10月25日以降および  
前回報告以降追加分)

### 10月

- 26日(月) 管区人権担当者会議〔管区事務所〕
- 27日(火)～29日(木) 定期主教会〔郡山〕
- 30日(金) 青年委員会〔管区事務所〕

### 11月

- 4日(水) 財政主査会〔管区事務所〕
- 4日(水) ハラスメント防止担当者打合せ〔名古屋〕
- 5日(木) 正義と平和・日韓協働プロジェクト〔管区事務所〕
- 6日(金) 正義と平和委員会〔管区事務所〕
- 6日(金) 西日本地区資料保管に関する協議会〔聖バルナバ病院/大阪〕
- 12日(木) 主事会議〔管区事務所〕
- 16日(月) 礼拝委員会〔管区事務所〕
- 16日(月) 祈祷書改正準備委員会〔管区事務所〕
- 25日(水) 常議員会〔管区事務所〕
- 26日(木) 教役者遺児教育基金運営委員会・建築金融資金運営委員会〔管区事務所〕
- 27日(金) 神学教理委員会主催公開研究会〔京都〕

### 12月

- 1日(火)～4日(金) 日韓協働合同会議〔韓国/ソウル〕
- 3日(木) 文書保管委員会〔管区事務所〕
- 4日(金) ウィリアムズ主教記念基金運営委員会〔立教大学・太刀川記念館〕
- 10日(木) 原発と放射能に関する特別問題プロジェクト運営委員会〔管区事務所〕
- 11日(金)～12日(土) 各教区財政担当者連絡協議会〔管区事務所〕
- 12日(土) 正義と平和・憲法プロジェクト〔中部教区センター〕

### <関係諸団体等会議・他>

- 10月26日(月) キリスト者平和ネット運営委員会〔富坂キリスト教センター〕

(次頁へ続く)

れようとしています。

私たちキリスト者は、2000年以上も前の出来事から真理を探究しようと聖書を学びます。あらゆる“いのち”の尊厳を大切に、主の平和を求め、記念する私たちは、信仰の課題として真剣に考え行動していかなければならないのだと私は思います。

「主は多くの民の争いを裁き、はるか遠くまでも、強い国々を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない。」(ミカ書4:3) 予言者ミカが記した旧約聖書の言葉です。先日125周年を迎えた韓国と日本の聖公会が30年以上にわたって歩んできた和解と協働の歩みは、東アジアや全世界に誇るべき先輩方の宝物だと思います。東アジアの平和に資する日本の教会の役割はとて大きく、責任の伴うものだと実感する年を迎えています。

(前頁より)

- 11月11日(水) 日本バプテスト連盟総会〔天城山荘〕  
 14日(土) 日本聖公会クワイヤーフェスティバル〔立教学院諸聖徒礼拝堂〕  
 16日(月) 日本盲人キリスト教伝道協議会〔管区事務所〕  
 18日(水)～21日(土)「マイノリティー問題と宣教」国際会議〔在日本韓国YMCA〕  
 12月14日(月) 日本キリスト教連合会常任委員会  
 20日(日) 子どもとオペラ・王子とクリスマス〔川崎〕



## □各教区

### 北海道

- ・ 聖職接手式 2015年11月23日(月)8時～北海道教区主教座聖堂(札幌キリスト教会) 説教:司祭 松井新世 執事接手:志願者 聖職候補生 クリストファー永谷 亮
- ・ 第74(定期)教区会 2015年11月22日(日)17時半～23日(月・祝)16時 北海道教区主教座聖堂(札幌キリスト教会)

### 東北

- ・ 第97(定期)教区会 2015年11月20日(金)18時半～21日(土)16時 主教座聖堂・仙台基督教会礼拝堂・ビンステッド主教記念ホール

### 北関東

- ・ 聖職接手式 2015年11月3日(火・休)11時 北関東教区小山祈りの家礼拝堂 司式:主教 広田 勝一 説教:司祭 秋葉 晴彦 執事接手:志願者 聖職候補生 マリア越智容子
- ・ 第82回(定期)教区会 2015年11月23日(月・休)10時半～17時 志木聖母教会

### 東京

- ・ 聖職接手式 2015年10月19日(月)19時

半 スコットランド聖公会 アバディーンおよびオークニー島教区 聖ニニアン教会(St. Ninian's Episcopal Church) 説教:司祭 高橋宏幸 執事接手:志願者 聖職候補生 ヨハネ塚田重太郎

- ・ 第125(定期)教区会 2015年11月23日(月・休日)9時～17時 聖アンデレ主教座聖堂、聖アンデレホール

### 沖縄

- ・ 第63(定期)教区会 2015年11月22日(日)16時～21時 23日(月)8時半～15時 沖縄教区センター



† 逝去者 霊魂のパラダイスにおける光明と平安を祈ります。

マルタ神崎しづ (九州教区・元婦人伝道師)  
 2015年10月17日(土)逝去(103歳)

## 📖 出版物案内

『2016年度 教会暦・日課表』

2015年10月15日付発行 価300円(税込)

**特集・2015年日本聖公会人権セミナーの報告**

◇今年度の人権セミナーは神戸教区が担当教区となり9月29日から10月1日まで広島市で開催され、各教区人権担当者と一般参加者、管区人権担当者が参集した。講師に森瀧春子、近森紘子、イ・ジュングンの諸氏をお招きした。ここにセミナーの報告を特集します。

**広島を歩いて思わされたこと <総合報告>****管区人権問題担当 司祭 奥村貴充****■はじめに**

わたしが広島を原爆のことを初めて耳にしたのは小学3年生の7月、担任の先生が絵本の『広島を歩く』を授業で取り上げた時のことです。その時は「なんて恐ろしい爆弾なんだ。こんな爆弾がこの世界にあるのか」と恐怖心にさいなまれたものでした。

そういう恐怖心にさらに拍車をかけたのは、小学5年生の時に授業でアメリカ合衆国とソビエト連邦を軸とした冷戦世界において2大勢力が核兵器によってお互い威圧し合っているということを知った時でした。ですので、大都市が標的になっているだろうということで、大阪南部に住んでいる田舎者のわたしが大阪の大都会に用事で出て来た時は、いつ核兵器が落ちてきてもおかしくないと思い、心配しながら街を歩いたことを記憶しています。そしてこのような対立の構造はどう考えてもおかしいと子ども心に感じたものでした。

そのようなわたしが広島を訪れる機会が与えられたのは小学6年生の時、修学旅行でのことでした。初めて訪れる被爆地の街、実際に歩いてみるとそれは授業で聞いていたのとは違う肌で感じる広島でした。その頃は昭和時代の末期、様々な年代、明治生まれの人から太平洋戦争中に青年時代を過ごした人、そして戦後生まれの人がこの国に同居していた時代でした。今よりも実際に被爆された方々が多くおられ

たので、実際の声を知る機会がありました。それによって原爆の恐ろしさというものを生で感じたものでした。

**■第1印象**

あれから約30年、時の経過というのは早いもので、今回の人権セミナーで改めて広島に来てみると小学生の頃に初めて来た時よりも高層ビルやタワーマンションが立ち並び、広島駅周辺の再開発の影響によって街が新しくなっている感じでした。

確かに街が整備されて住みやすくなっていくのは生活の利便性が向上することです。しかし、同時に被爆したというあの70年前の事実が徐々に風化されていっているのではないかとすることもこの時、少しは感じました。被爆された方も高齢化が進み、物故される方も年ごとに増えていっています。「新しくなっていく広島。昭和も遠くなりにはけり」というのが広島駅周辺に立った時の第1印象でした。

**■フィールドワーク**

そのような広島に来た時の第1印象を払拭したのが2日目に行なわれたフィールドワークです。現在はきれいに整備されている平和公園にも随所に被爆の痕跡が残り、「広島という街全体が墓場なのです」という説明を聞いた時に、開発されていっている街の様子に目を奪われていた自分の思考・感受性を恥じ入る思いがまし

た。それは安穏とした普段の生活の中でいかに自分が広島という被爆地のことを心に覚えていなかったのか、小学生の時に経験した学びがいかに自分の中で風化していたかということがあらわになったということを意味しています。そして正直に言って観光地としての広島ということに目を奪われていた自分に気づかされた思いです。

しかし、原爆ドーム、広島城、通信病院など解説を聞きながら広島の街を体感していくうちに、被爆というのは70年経過しても決して消し去ることのできない負の遺産なのだということを改めて思い知らされた感じでした。特に印象に残ったことは広島城内に今も残る地下室の司令部跡です。そこも被爆によって犠牲者が出て、壊滅状態になった場所ですが、勤労働員されていて生き残った女学生が文書で残した体験談を読んで、原爆というものが非人道的な兵器であることを思い知らされました。また当時の通信病院が今は資料室として保存されていますが、被爆された方々の懸命な治療にあたった医師や看護師たちの苦難の様子の話聞き、心打たれました。



広島城内の地下の指令室跡

このように被爆当時の痛々しい様子を聞き、かつて小学生の修学旅行で訪れた時の思い出が脳裏によみがえってきました。広島は時の経過とともに整備されていってはいますが、被爆地というのは過去のことではなくて今もこの地で抱えている深刻な問題であるということを思い知らされました。

こういう地に立って希望を与えてくれたのが被爆樹木です。被爆後数十年は草木も生えないと

いわれていたこの広島の地に、再び緑の葉を生き茂らせたことはお恥ずかしながら初めて聞きました。爆心地2キロメートル以内には約170本の被爆樹木が今もなおこのように残っていることは、「希望」という以外に何とも言うことはできませんでした。と同時に、いのちの大切さと復活をこの被爆樹木が象徴的に表しているかのようでした。



被爆樹木

#### ■結び

最終日は4つのグループに分かれて、この人権セミナーで経験したことの分かち合いをしました。今回は戦後70年ということでテーマがはっきりとしている点が良かったということと、教会の体質を変革していかなければならない点などが話し合われました。

最後には閉会の聖餐式をし、信施23,010円は在韓被爆者渡日治療広島委員会のために献げられました。このようにして参加者はそれぞれの教区にまた戻っていったわけですが、再び広島駅周辺に来た時、やはり初日の印象とは違った感じがしました。それは再開発等が進んでも、今もなおやはり被爆の後遺症に苦しむ方々がおられるということ、そしてこれからもずっとこの街が抱えていかなければならない傷跡があるということ胸に刻み、心の内に覚えていかなければならないということです。

帰り際に次のようなことがありました。広島駅のコンコースをわたしがたまたま歩いていた時に茶髪の子高生が「彼氏ほしいわぁ」と軽々しく友達と言っているのを耳にしたことです。この時に被爆し火傷を負った70年前の女学生の写真が脳裏をかすめました。この対極にある両者の姿。繁栄している広島とは裏腹に、被爆というのが忘れ去られてはなりません。今のわたしたち

が家族や友人等と一緒に平和に暮らせるのも70年前に戦争で苦勞した方々、犠牲になった方々、そして戦後になって復興のために懸命に生きた方々がおられるということ、そうした方々の上に胡坐をかいている感じがしてなりません。

最後になりますが視野を広げれば、福島原発事故の問題、チェルノブイリ、そしてイラク戦争で米軍が使用した劣化ウラン弾、様々な事情

によって放射能に苦しんでいる方々の存在も忘れてはならない問題です。特に日本では原発の再稼働の問題があります。教会が原発問題とどのように向き合っていくか、今回の人権セミナーで学んだこと、気付かされたことは今後の宣教を考えていく上での糧としたい所存です。

(大阪教区聖贖主教会)

## ■ 2015年人権セミナーに参加して

### 「ヒロシマと人権 ～主の平和実現のため～」

神戸教区 司祭 バルナバ 瀬山会治

担当教区であったと言うこともあり、今回初めて参加させていただきました。10年間、毎年8月5・6日に広島復活教会では「広島平和礼拝」がな行なわれており、その経験を基に企画された今回のプログラムはどれもよく準備された素晴らしいものでした。被ばく証言や碑めぐりなどは充実した濃い内容でしたので、後から資料などを見返してじっくりと理解する時間が必要であったほどです。

閉会礼拝でも言われていましたが「戦争は最大の人権侵害である」とはまさにその通りで、実際に見て、聞いてわかることも多くありました。さらに被差別部落や在日朝鮮・韓国の人びとにとっては差別と偏見による二重、三重の苦しみがそこにあったようです。

放射能の影響による様々な病気への恐怖、愛する人びとを失った深い悲しみと憎しみ、「水をください。助けて」との叫び声に答えることができなかつた贖罪と後悔の念、そうした様々な十字架をある日突然、背負わされて歩いてゆくこととなった方々からの平和への願いは、次の世代に伝えていかなければならない大切なメッセージとなりました

牧師の家庭に生まれた近藤紘子さんの被ばく証言では、信仰者としての赦しが語られました。

彼女は広島に原爆を投下したエノラ・ゲイの搭乗員を悪魔と憎み、「大人になったら必ず仕返しをしてやろう」と決心されながらも、10歳のときにアメリカのテレビ番組でロバート・ロイス副操縦士と対面します。彼は原子爆弾が爆発したときに思わず「お母さん、私たちは何と言うことをしてしまったのでしょうか!」と叫んだと言って悔の涙を流しました。その涙を見て「私の中にも悪がある。私は正しい人、あなたは悪い人だと思っていた。だが、私が憎むべきは戦争を起こす人間の悪。この人ではない。」彼女は思わず彼に近寄り、その手に触ると彼はギョッと彼女の小さな手を握ったのでした。その後、アメリカ留学中にあの時に言えなかつた「ありがとう」を言おうと再会を試みたのですが果たせず、帰国後に彼の死を知り、後悔されたそうです。

戦後70年の今年、広島で人権セミナーが開催されたことは、管区人権問題担当者の皆様の意図があつてのことだと思いますが、ここから今日ある戦争や原子力、差別の問題をしっかりと受け止め、行動していくことが「主の平和」に向かう道であるように思います。



## ■ 2015年人権セミナーに参加して

## 「原爆によって生きる権利を奪われた人々」

鹿児島復活教会 藤田 啓子

9月29日から10月1日まで 広島復活教会で行なわれた「2015年人権セミナー」に参加した。

参加者は26名、管区の人権問題担当の方々と司祭様がた、一般の信徒は数名であった。セミナーは8つのセッションで構成され、「聖餐式」「基調講演」「被爆された方の証言」「フィールドワーク」「DVD鑑賞」「分かち合い」などであった。

「基調講演」で森瀧春子氏は、原爆投下直前に疎開をして、被爆は免れたとの事。2年目の夏休み、疎開先から帰って、広島の川で泳いでいた時に、川の中で赤ちゃんの頭蓋骨を見つけた。広島大学で働いていた父はそれを見て号泣した。父は8月6日になると原爆でなくなった学生たちのことを思い涙を流していた。4年後、疎開先から広島に帰って、友人たちのケロイドを見た。友人は高校卒業後就職した。しかし原爆の傷によって差別された。広島は復興したが裏の部分が残った。自分はその記録を残さねばと思った、と核問題について取り組むことになったきっかけを語られた。大学卒業後は広島で働き、国内のみならず世界で「核兵器廃絶」の活動をしておられます。

ウラン鉱山による核の採掘に始まり、製錬、核兵器、核燃料製造、2000回におよぶ核実験、劣化ウランの兵器使用などウラン利用のサイクルについて学んだ。原発から出る廃棄物を保管する六ヶ所村は、燃料として再利用が考えられている毒性の強い「プルトニウム」や、核兵器として使用される「劣化ウラン」を取り出すための目的もあった。「劣化ウラン」は放射能が40%ほど残っており、兵器として使われた後も環境汚染につながっている。核兵器の為 命を失った多くの人々、癌や白血病に苦しむ人達は、国から見捨てられているように感じた。国の代表の形式上の慰霊や文言では、命も人権も取り戻せない。「戦

争は人の命を守るために何の根拠もない」事を学んだ。

被爆証言のお2人の話も悲惨で壮絶であった。近藤紘子氏の証言。ピカッと光った直後、学徒動員で一緒にいた少女たちの皮膚が焼けただれ、お互いの手が引くついている少女、顔が腫れあがり目が飛び出している人。その苦しみと悲しみも70年経ったら風化してしまいそうな状況である。

B29に乗って原爆を投下したキャプテン、ルイスは投下後すぐ広島を上空を離れたが、彼には投下後の広島を確認する任務があった。彼は引き返して広島を見て上司に「広島がなくなっている。私たちはとんでもないことをしてしまった。」と報告したそうだ。その後、彼は精神的に不安定となり人にも会えない状態になったとの事。

在日韓国人の李 鐘根氏の証言は、被爆と差別に苦しみ耐えてこられた内容であった。彼らの悲痛な現実当事者に聞かない限り、私達は想像できない。

私たちは70年前のこの現実を語り継ぎ祈るだけでいいのだろうか？ 安保法案や原発問題に多くの国民が必死に声を出し行動した。しかし当たり前のように国会で成立した。

戦争に参加したり、原発を稼働したりする事を望んでいなくても、弱い(個の立場の)国民は行動を起こさなければならない。世界の大統領や首相たちが「戦争をしない」と言ってくだされば、少なくとも人為的に命を奪われたり 環境の破壊や汚染はなくなる。軍事費に使う莫大な費用を平和の為に役立ててもらいたい。聖餐式での中島司祭の説教で『聖公会が人権について取り組むようになった歴史』を聞いた。今回のセミナーで、九州教区外の方々と交流ができた。

お世話をしてくださった 広島復活教会の方々 に心から感謝します。

## 大韓聖公会 125周年記念礼拝に出席して

管区事務所総主事 司祭 エッセイ 矢萩新一

去る10月3日、大韓聖公会125周年記念礼拝がソウル大聖堂にて行なわれました。日本からは植松誠首座主教をはじめ各教区の代表者、アメリカ聖公会からはキャサリン・ジェファーツ・ショールー総裁主教、アレン・シン主教（アメリカ初の韓国人主教）、日本聖公会でお働きの宣教協働者や大韓聖公会の3つの教区（釜山・大田・ソウル）の司祭、信徒ら約2,000名が祈りを共にしました。



宣教 125周年を迎えて

大韓聖公会（1993年4月16日管区成立）は、1890年に英国のチャールズ・ジョン・コーフ主教が宣教を開始されてから125年、最初の韓国人司祭の按手から100年、最初の韓国人主教按

手から50年という年月を記念しました。

記念礼拝に先立ち、韓国人初のキム・ヒジュン司祭の銅像除幕式が行なわれ、礼拝堂の外に設置された強大スクリーンに映し出すためのテレビ中継が行われる中、200名以上のプロセッションを組んで入堂しました。「自然・人・神との和解」という宣教125周年のテーマをもとに、キム・グンサン大韓聖公会議長主教は、説教の中で「分断、二極化、葛藤、対立の時代の中で宣教125周年を迎える。神が与えてくださるミッションは和解だ。欲望を満たそうと自然や人間を犠牲にして生きてきた私たちは、神と和解し、近隣の人々と和解し、自然と和解しなければならない。朝鮮半島の平和統一へ向けた継続的な歩み、セウォル号沈没事故の犠牲者や遺族、不安定な非正規雇用で苦しむ労働者、移住労働者の人権など、和解者としての努めを果たしていかなければならない。」

と語られました。

世界聖公会の宣教の5指標をもとに、子どもや女性を含む代表者5名による代祷も献げられ、被造物の秩序維持、社会的弱者のため、朝



キム・ヒジュン司祭の銅像除幕式



「自然・人・神との和解」を求める祈り

鮮半島の平和統一と北朝鮮宣教のために祈りました。

記念行事の一環として、9月30日からエピスコパル・アジアアメリカ・ミニストリー (EAM) の総会も行なわれており、植松首座主教が基調講演をされ、戦時体制に迎合していった日本聖公会の戦争責任告白や30年におよぶ日韓両聖公会の和解と協働の歩みなどについて話されました。前日の2日には、1900年に宮大工によって建てられた韓国最古級の江華邑(カンファ・ウプ)教会(日本軍によって供出させられた手すりを2010年に日本聖公会が回復・寄贈)などの見学。その一行とは別に、同日夜には日本で働く宣教協働者の礼拝と集いも行なわれ、故郷での話や日本での様々な苦勞をねぎらい合いました。



記念コンサート

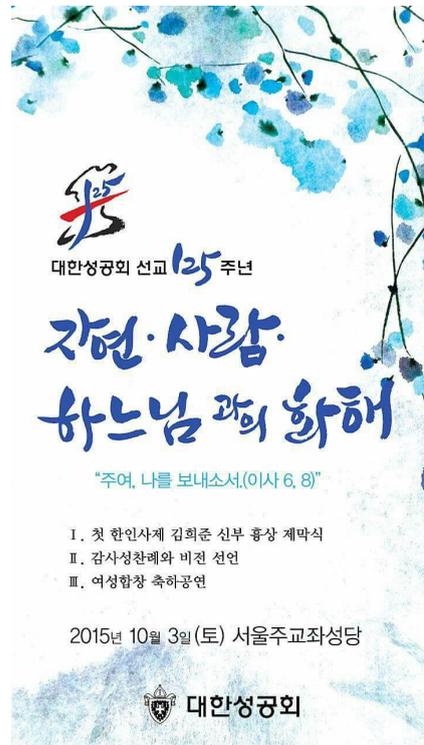
記念礼拝当日の午後は、記念コンサートや講演会などが行なわれ、夕方には祝賀会がもたれ、翌日の日曜日は海外からの参加者は様々な教会で礼拝に参加し、説教の奉仕をされた方々もおられました。



式場を彩ったエンブレム

かつての支配・被支配という関係を乗り越え協働していく大切なパートナーとして、大韓聖公

会の125周年を共にお祝いすることができた喜びと、負の歴史をしっかりと認識し続けることの重要さを認識させられた記念行事でありました。右傾化する日韓両国の中で、神さまの創造された人と自然に対する和解の努めをこれからも共に、しっかりと担っていきたいという思いを新たにしました。(写真は大韓聖公会提供)



## 世界の聖公会の動向

渉外主事 司祭 ポール・トルハースト

### WCC広島・長崎巡礼2015

WCC (World Council of Churches) の使節団は、8月5日～7日、広島で行なわれた平和と正義の巡礼に参加した。イベントは、ローマカトリック教会-聖公会平和行進、カトリック世界平和記念聖堂での記念礼拝、広島原爆慰霊式典への参加、日本聖公会主教たちと他教派教会の代表参加者との歓迎食事会など。また、核兵器根絶に向けての他宗教シンポジウム、広島県知事と被爆者の方々との面会、平和記念公園と博物館巡りにも出席した。

すべての行程は順調で、今回の使節団の巡礼のために周到に計画を準備していただき、案内して下さった広島復活教会の小林真子さんに感謝。この巡礼に関しては、ACNSやWCCを介し、かなりの追跡報道がなされ、世界的メディアも大きく取り上げている。



広島記念礼拝 2015



### “まだ復興していない”と、ネパールの司祭長は語る

ネパールの国内最年長聖公会司祭長ルイス・ルー師は、「無数の死者を出し、またその数を遙かに上回る、住む場所さえ失った負傷者を出したあの大地震から100日近く経ったが、ネパールは完全な復興にはほど遠い」と語った。

「大地震発生から3か月」、と語り始め、「ネパールでの生活は元に戻ったかのように語ることは思いあがった考えである。なぜなら、ほとんどのネパール人にとって、あの悲惨事が起こった日を境に、物事が以前と同じように戻ることは決してありえないのだから。

ネパールでは530,000以上の建物が崩壊し、4,300の学校を失った。家、地域社会、国の再建はあまりにも巨大で、自己犠牲と強固な協力一致がどのレベルでも要求される。」と語った。

8,000人以上の人々が命を失い、14,000人が負傷し、ネパールにおける過去80年間で最悪の自然災害となった。また、5月12日の2度目の余震は、深刻な被害を引き起こし、さらに100人以上が亡くなった。

ルー司祭長はこのことを風化させないよう世界に呼びかける。「我々は過去2、3か月内に、世界規模の問題で途方に暮れ、大打撃を受けた・・・私の祈りと希望は、国際社会がネパールの再建に対する支援の度合いを増していくことです。」

最悪な被害を受けた辺境の地の、無数の被害者たちに、食物、仮設住宅、精神的援助が4月25日の大地震発生の朝以来、CMSによって支給されている。

### 洪水被害国でのミャンマー教会の対応

ミャンマー管区の教会・聖公会同盟は、2次的援助として洪水被害支援委員会を立ち上げた」と報告した。

ミャンマーの社会福祉・救助・再定住省は、250,000以上の人々が影響を受け、69人は亡くなったと伝えた。

台風コーメンは7月30日からミャンマーをはじめ

他の国々を襲った。嵐は7月の激しいモンスーンの雨を伴って、洪水と地滑りをもたらした。洪水は水を増すごとに国土の山々を洗い流していくと恐れられた。

ミャンマー聖公会の首座主教ステファン・タン・ミント・オォ師はこの洪水の深刻さを強調した。“親愛なる聖公会の兄弟姉妹のみなさま、大洪水に襲われたミャンマーの人々とミャンマー管区のために祈ってください”

“ここ2週間で、洪水はミャンマーの州、区域、国土のほとんどを覆うでしょう。この洪水で私は2008年に発生した大惨事、台風ナルギスを思い起こします。我々は皆さんの祈りとサポートが必要です。”

迅速な対応で、その日の内に教会は、辺境の地にも救済委員会と、食糧と水を分配するための調達救済を動員したと、聖公会救済・開発担当のヌグラン・ネジャ師は語り、“ミャンマーの教会は、‘牧会者と災害’災害時運用の工具の作成と使用に取り組み、そして、台風コメンに対する対応として、これらをさらに開発使用している。”と付け加えた。

### 英国国教会の初代女性教区主教就任

7月24日、クレディトン地区サラ・ムラリー主教と、グロスター教区レイチェル・トゥレウィーク主教は、初代女性主教として就任し按手されるという歴史を、聖公会精神の歴史的な中心であるカンタベリー大聖堂において記した。

観察力に優れた説教者、ステップニー地区主教のエイドリアン・ニューマン師は説教の中で、「レイチェルとサラ両主教は、教会生活で相違点を示さなければならぬ」と強調した。

“女性主教には我々を大いに悩ませて欲しい、わたしのような多くの人々（白人、男性、中堅専門聖職者）に先導されてきている英国聖公会の慣例にチャレンジして欲しい”と語った。

トゥレウィーク主教は英国聖公会の最初の女性教区主教だが、全聖公会の最初の女性主教ではない。カンタベリー大聖堂で、ニュージランドのワイカト教区主教ヘレン・アン・ハートレ

イ主教と米国のインディアナポリス教区主教のケート・ウェイニック主教たちによって主教に連ねられたのだ。

さらに、歴史的に、彼女たちは1989年に按手された、全聖公会の最初の女性主教であるバーバラ・ハリス主教と同様、主教職位を継承していく。

### 英国聖公会は新しい詩編アプリを起動

英国聖公会は、古来の伝統をもたらしてきた詩編を、モバイル機器アプリと電子書籍(e-book)へ導入したと発表した。「Reflections on the Psalms (詩編の考察)」という書籍は、e-bookとモバイル機器アプリで朝夕の祈りの時に、古来より読まれてきた詩編を用いたいと思うすべての人たちのために出版された。

この新しい出版物には、それぞれの詩編に、主教、著名な作家、経験ある聖職者、聖書研究者、神学者たちの短い黙想が追記されている。また、神学者のポーラ・ゴダー氏による詩編の紹介と、シェフィールド教区主教のステイブン・クロフト師による教会生活における詩編のガイドも含まれている。

執筆者の一人のヨーク大主教ジョン・セントム師は、“詩編を読み聴くことは、神との対話の偉大な方法である。わたしも日々詩編を読み、思索することを大いに好んでいる。「Reflections on the Psalms (詩編の考察)」で、特定の詩編に語られていることの中から、他者に習うことが出来る。ただ単に自分自身の理解を深めるに留まらず、勇気、支柱、針路の宝庫を創り出す。”と記す。この書籍(紙書籍または電子書籍)とアプリはwww.chpublishing.co.uk.で購入可能。



管区事務所  
〒162-0805  
東京都新宿区矢来町65番  
電話 (03)5228-3171  
FAX (03)5228-3175

## 日本聖公会

NIPPON SEI KO KAI

PROVINCIAL OFFICE  
65, Yarai-cho, Shinjuku-ku  
Tokyo 162-0805, Japan  
Tel. 81-3-5228-3171  
Fax. 81-3-5228-3175

沖縄県知事 翁長雄志 様

米軍普天間飛行場の名護市辺野古沿岸部への代替施設建設事業に係る公有水面埋め立て承認の取り消しを支持します。

『一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、

一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです。』

コリントの信徒への手紙 一 12章 26節

私たちは日本聖公会に連なる者として、主イエス・キリストの教えに従い、すべてのいのちが尊ばれる社会の実現のために祈り活動しており、この度の米軍普天間飛行場の名護市辺野古沿岸部への移設に向けた埋め立て承認が正式に取り消されたことを支持します。

9月19日未明、本来の対話という姿がないまま、一方的に安全保障関連法案が採決されました。しかしこのような日本政府の姿勢は、名護市辺野古沿岸部への新基地建設計画においても同じです。これまで沖縄県の主張に耳を傾けず、対話の席に着こうともせず、今もなお強行移設に向けての工事再開の機会を狙っています。さらに言えば、この度の承認を取り消す表明の後、沖縄防衛局に意見を聴こうとされた時のことです。沖縄防衛局が「意見聴取でなく、行政手続法が定める『聴聞』を行うべき」と拒否したことに対し、沖縄県が「聴聞」を実施する旨の謙虚な姿勢を伝えても、沖縄防衛局は「承認に何ら瑕疵はなく、取り消しは違法」とだけ答え、しかも書面だけでそれに答え、聴聞には出席しませんでした。そして埋め立て承認が正式に取り消された今、沖縄防衛局は国土交通省に対し、取り消し無効を求める行政不服審査請求を行い、しかもその請求には時間が掛かるとの理由で取り消しの執行停止もあわせて申し立てている。これのどこが現代的な民主主義と言えるのでしょうか。これでは知事が言われるとおり、「新基地建設ありきの政府の強硬姿勢を端的に示した」だけで、私たちも「誠に残念」な気持ちでなりません。同じ過ちを何度も何度も繰り返しているとしか言いようがありません。どうして耳を傾けることも対話の席に着くこともしないのか、同じ日本の沖縄がとても苦しんでいるのに、叫んでいるのに、です。

翁長知事はこの度の埋め立て承認取り消しに際し、「日本の民主主義について、国民全体が考えるものになれば」と言われました。本当にその通りだと思います。でもそのための一つとしては、私たちが70年前の沖縄での地上戦によってたくさんのいのちが奪われ、そして終戦後も長きに渡って米軍基地の重圧、また1959年の宮森小学校への墜落事故をはじめ空からの危険、米軍人による様々な危険に苦しみ続けられた沖縄の皆さんに共鳴することです。まさに『一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです。』との聖書のみ言葉の通りに、です。そしてその上で、日本国という一つの体の、それぞれの部分である私たちがお互いに配慮し合う、つまり対話の席に着き、お互いに耳を傾けることによって、私たちはきっと本来の姿への一歩を踏み出すことができると信じています。

改めて、私たちはこの度の埋め立て承認の取り消しを支持します。「命こそ宝」だからです。私たち人間だけのそれではなく、いのちあるものすべての「命こそ宝」だからです。そのために、私たちも翁長知事の「今後も辺野古に新基地は造らせないという公約の実現に向け、全力で取り組む」と語られていることに共鳴し、また何度も何度も対話の席を準備されたことに倣って、日本政府にだけではなく、誰に対してもそれを大切にしていきます。そして加害者にも被害者にもならない「抑止力」は「基地」ではなく、「戦争」でも「敵対」することでも、「誹謗」「中傷」「弾圧」「迫害」をすることでもなく、「友」である、そのような社会が広がっていくようにと、これからも継続して祈り、また活動していきます。

2015年10月18日

宗教法人日本聖公会 正義と平和委員会



滝乃川学園は石井亮一・篤子夫妻が日本で最初の知的障害児者のための事業を始めから、お陰さまで今年で創立125年を迎えます。今まではしょうがい者の平均寿命は短く、あまり高齢化は問題にされてきませんでした。しかし、医療の進歩や知的しょうがい者の生活状況が改善されたことで、平均寿命が伸びたために、高齢化の問題が出始めています。そこで、前例は少ないのですが、高齢しょうがい者のための専用施設を整備することにいたしました。総事業費は6億5千万円、うち国・都の補助金、借入金を除いても1億8千万円ほどの自己資金が必要です。皆さま、どうか覚えてお祈りくださいますようお願い申し上げます。

10月25日

2015年 日本聖公会

日本聖公会管区事務所ホームページ：<http://www.nskk.org/province/>  
☆「管区事務所だより」についての要望・寄稿などをメールでお寄せください。